

ともしび双書

神奈川県福祉作文コンクール 入選作品集



平成 28 年度版

まえがき

福祉作文コンクールは、昭和52年から始まり、今年で40回目を迎えました。コンクールを通じて、次世代を担う子どもたちに「たすけあい」や「思いやり」の気持ち芽生え、誰もがお互いを支え合う「ともに生きる福祉社会」を築いていくための一助となるように願い、行われてきました。

今年、県内の小・中学校合わせて248校から9,381編の応募がありました。小・中学生別に、県内市区町村ごとの地区審査会および県最終審査会を経て、最優秀賞16編、優秀賞20編、準優秀賞20編の入選作が決定いたしました。

本作品集は、入選された56編の作品の中から最優秀賞15編を掲載してあります。どの作文も、自分自身の体験や経験を通じて感じたこと、考えたことなどが丁寧に書かれています。この作品集が県民皆さまの目に留まり、相手を思いやり、たすけあい、支えようとする気持ちが社会全体へ広がっていくことを願っております。

本来ならば、すべての入選作品をご紹介したいところですが、誌面の関係で、優秀賞及び準優秀賞は作品の題名・学校名・氏名のみを掲載させていただきました。

なお、最優秀賞を受賞された作品は、児童、生徒のお気持ちを尊重し、原則として原文どおりに掲載しています。

結びにあたり、コンクールに参加した小・中学生の皆さん、指導にあたられた先生方、ご家族の皆さま、ご多忙のなか審査をしていたいただいた委員の方々に、心よりお礼申しあげます。

また、ご協力いただいた神奈川県、神奈川県教育委員会、各市町村教育委員会、日本放送協会横浜放送局、テレビ神奈川、神奈川新聞社、日揮社会福祉財団の皆さまに深く感謝申し上げます。

平成二十八年十二月

社会福祉法人神奈川県共同募金会
社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会

審査にあたられた方々

日本放送協会横浜放送局
 放送部部長
 株式会社テレビ神奈川
 営業本部 営業推進室長兼事業推進部長
 株式会社神奈川新聞社
 クロスメディア営業局 出版メディア部部长
 公益財団法人日揮社会福祉財団
 常務理事兼事務局長
 神奈川県保健福祉局福祉部
 地域福祉課 課長
 神奈川県立総合教育センター
 教育課題研究課 研究開発班指導担当主事
 社会福祉法人神奈川県共同募金会
 常務理事
 社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会
 常務理事

広田俊明
 遊馬秀樹
 霜崎謹二
 木高正志
 笹島大志
 田中恵美
 八木明
 石黒敬史

(順不同/敬称略)

第40回神奈川県福祉作文コンクール入選作品集 目次

小学生の部

最優秀賞

神奈川県知事賞

みんな同じ人だから

大磯町立大磯小学校

二年 萩村明希穂……………1

神奈川県教育長賞

特別な友達

大磯町立国府小学校

六年 二宮 珠生……………3

日本放送協会横浜放送局長賞

ぼくのおにいちゃん

相模原市立淵野辺東小学校

二年 中野 嗣哉……………5

テレビ神奈川社長賞

寄りそう心

開成町立開成南小学校

六年 鵜飼日菜乃……………7

神奈川新聞社長賞

くるまいすのおてつだい

ふれあい賞

ふつうに生きたい

神奈川県共同募金会長賞

優しさ

神奈川県社会福祉協議会長賞

もう一度、勝負したい

南足柄市立向田小学校

一年 北館 祐輝……………9

伊勢原市立竹園小学校

五年 松田 一真……………11

南足柄市立向田小学校

六年 小俣ソフィア……………13

伊勢原市立竹園小学校

六年 野崎 唄

※本人・家族の意向により未掲載

中学生の部

最優秀賞

神奈川県知事賞

僕の姉

秦野市立南中学校

二年 伊藤 大地……………15

神奈川県教育長賞

人とのかわり

伊勢原市立成瀬中学校

三年 東 愛美……………19

日本放送協会横浜放送局長賞

ひいおばあちゃんへの恩返し

大井町立湘光中学校

一年 澤地未依奈……………22

テレビ神奈川社長賞

叔父が教えてくれたこと

葉山町立葉山中学校

三年 白岩 桃奈……………26

神奈川新聞社長賞

色

茅ヶ崎市立松浪中学校

一年 栗原 那綺……………29

ふれあい賞

祖母との会話

厚木市立厚木中学校

三年 樋川

陸…………… 33

神奈川県共同募金会長賞

個性を尊重し合って

相模原市立旭中学校

一年 光橋

優奈…………… 37

神奈川県社会福祉協議会長賞

この広い世界で

相模原市立藤野中学校

一年 山崎

花…………… 40

優秀賞・準優秀賞入選者名簿

…………… 45

小学生の部

最優秀賞

神奈川県知事賞

みんな同じ人だから

大磯町立大磯小学校

二年 萩村 明希穂

わたしには、耳の近くに「ふくじ」という、みんなにはないものが、生まれた時からあります。これは、わるいものではないから、しんばいしなくて大じょうぶだと、前におかあさんから聞きました。
でも、

「なんか、ここにあるよ。」

「なにそれ、きもちわりい。」

と言って、からかわれたり、ひっかかれたりしたことがあります。

「やめて、生まれつきなの。」

と言つても、やめてくれませんでした。

わたしは、いつもは気にしていないし、たのしくすごしていると、わすれているくらいなのに、そんなことを言われると、すごくいやな気持ちになります。

だから、わたしみたいに、みんなにはないものがあつたり、みんなにあるものがなかったりする人が、近くにいても、いつも通りになかよくあそんだり、たのしいお話をしたいと思いません。

それは、「ふくじ」のことを、気にしないで、なかよくしてくれるおともだちもいるし、わたしは、みんなと同じだと思つているからです。

びょう気の人や体のふじゆうな人、元気な人でも、お年よりや赤ちゃん、いろんな人がいます。ちがうところがあつても、みんな同じ「人」です。

わたしは、びょう気の人や体がふじゆうな人をいじめたり、からかうのは、いけないと思います。話すことができない人がいても、なかよくしたり、たすけ合つていけば、ころろはつながると思います。元気がない子がいたら、すこしでも元気になれるように、いっしょにたのしいことをしたいです。

みんながたすけ合つて、たのしくくらせるようになったらいいなと思つています。

最優秀賞

神奈川県教育長賞

特別な友達

大磯町立国府小学校

六年 二宮 珠生

登校中にニコニコしながら、手を振ってくれる女性がいる。母が働いている知的障害者施設に通っている女性で、何度か会っているうちに笑いかけてくれるようになった。

知的障害者と聞くと、「怖い」といったマイナスのイメージをいだいてしまうことがあるという。また、家の前を散歩しないしてほしいと要望があったこともあるらしい。どうしてそんな言葉が出てくるのだろうか。彼らが何をしたいというのか。

私はこの夏、施設の夏祭りに参加した。少し緊張していたら、朝会う女性がいつもと同じ笑顔で近づいてきて、握手をしてくれた。私の緊張は一気に消えた。彼女の名前はNさん。私の母より年上だ。Nさんは私の名前を教えてほしいとメモを差し出してきた。字が読めて

いるような不思議な表情を浮かべていたが、一生懸命「たまちゃん。たまちゃん。」と覚えようとしてくれていたことがとてもうれしかった。Nさんは、私のことを喜ばせようと食べ物を選んでくれたり、手を引いてくれたり、顔を覗き込んで笑いかけてきたり、本当に一生懸命だった。私はNさんと友達になった。Nさんは施設にいる人たちのことも紹介してくれた。叫び声をあげている人、無心に食べ物にかじりついている人、不思議な話を何度もくり返す人などもいた。確かに、私の周りにいる人たちとは少し違っていた。けれども、それが怖いとか、嫌だという感情は私には湧かなかった。なぜならば、彼らの笑顔がとても自然だったからだ。なんてうれしそうに笑うんだろう、なんて美味しそうに食べるんだろう。その笑顔を見ていたら、愛想笑いをついしてしまう自分が情けなく思えてきた。

知的障害であるため、できないことがあるのも事実。時には他人へ迷惑をかけてしまうこともあるだろう。でも、彼らは一日一日精一杯生きている。そして心からの笑顔という私たちには欠けている魅力が彼らにはある。私はまだ彼らのことを知らない。もっと障害について知りたいと思った。そしていつか、手助けができるような大人になり、学びつつ支えあっていけたらなと思った。今はまず、彼らが「怖い」などと呼ばれる存在ではなく、とても魅力あふれる人たちなんだと伝えていくことに力を尽くしたい。

最優秀賞

日本放送協会横浜放送局長賞

ぼくのおにいちゃん

相模原市立淵野辺東小学校

二年 中野 嗣 哉

ぼくのおにいちゃんは、ごはんがたべられなくて、自分で歩くことができません。いつも車イスを、おかあさんにおしてもらっています。ごはんは、鼻からおなかの中に入っているチューブから、えいようざいをちゅうにゆうします。お話しは、できませんが、うれしい時は、わらいます。そして、かなしい時は、「アー。」と言ういやな声を出します。

ぼくがおにいちゃんとあそぶ時は、おにいちゃんのすきなオモチャをとってあげます。おにいちゃんは、そのオモチャを手でもってかじったりしますが、ときどきおとしてしまうことがあります。ぼくにとってはかんだんなことでも、おにいちゃんにとってはむずかしいことなのだと思います。

おかあさんやおとうさんは、いつもくすりあげたり、だっこでおふろに入れたり、オムツをかえて、おにいちちゃんのせわをします。

この前、おかあさんとおにいちちゃんといっしょに、えいがをみに行った時に、とちゅうでおにいちちゃんが、ウンチをしてしまいました。おかあさんがトイレにつれて行っているあいだ、ぼくはドキドキしながらまっています。

おにいちちゃんは、いろいろたいへんなことがあるけれど、かぞくはみんな、おにいちちゃんのことを大すきでだいじにしています。

でもいやな気もちになることもあります。はくぶつかんに紙しばいを見に行った時に、おにいちちゃんが声を出していたら、じろじろなんども見られたことがあります。そんな時、ぼくは少しいやな気もちになります。おにいちちゃんがへんな子だと思われたようにかんじるからです。

そういう時は、見てもいいけれど、「大じょうぶかな？」という、やさしい気もちで見てほしいです。そして、しょうがいのある人を「がんばっているな。」という目で、見まもってほしいです。ぼくはこれからも、おにいちちゃんをたすけていきたいです。

最優秀賞

テレビ神奈川社長賞

寄りそう心

開成町立開成南小学校

六年 鵜飼 日菜乃

私には、自閉症という障がいのある弟がいます。また、私の祖父は、脳内出血で半身不随となり、四十九歳という若さで亡くなりました。そのため、私の家では、障がいについて話をする機会がとても多いです。病院で働いていた母は特に、障がいを抱えた人々をたくさん目にしてきたので、

「子どものころから、様々な人とふれ合って、社会の現実を知っていく事は大切だよ。」と、私に話してくれます。「もつと、障がいのある人々の事が知りたい。」そう思った私は、今年の夏、地域の福祉活動に参加する事にしました。

それは、開成町社会福祉協議会が行っている、「ふくし一日教室」です。ここで私は、認知

症の方について教えてもらいました。

教えてくれた人は、認知症サポーターの方でした。その人は、「認知症の人の気持ちに寄りそう事が大事だ。」と言っていました。認知症になると、色々な事を覚えていられなくなるそうです。ご飯を食べた事を忘れてしまったり、さらに進行すると、自分の周りの人々の事も忘れてしまうそうです。私の家族がもしそうなってしまったら、とても悲しいと思います。でも、本人は悪気はないし、一番辛いのは本人だから、間ちがいがたくさんあっても、責めてはいけないと思いました。

これは、自閉症の弟にも言える事だと思えます。弟は、脳の障がいなので、よく分からずに間ちがった行動をとってしまう事が多いです。私は、頭にきて怒ってしまう事もあるので、弟が悲しそうな顔をしていると、悪い事をしてしまったな、と思う事がよくあります。弟と関わるのは、とても難しいのですが、認知症の人の話を聞いて、弟の事も、もつと理解してあげなければいけないな、と思いました。

障がいのある人と関わる上で私が大切だなと思った事がもう一つあります。それは、その人が好きな事を一緒に楽しむ事です。その人が好きな音楽を一緒に聞いたり、好きなテレビと一緒に観たり、出来る事はたくさんあるのだと知りました。幸せの形は、人それぞれ違うからこそ、その人の事をくわしく知る必要があるのだと思います。一人ひとりが寄りそう心を大切にして、笑顔あふれる社会にしていきたいです。

最優秀賞

神奈川新聞社長賞

くるまいすのおてつだい

南足柄市立向田小学校

一年 北館 祐輝

ぼくには95さいになったひいおばあちゃんがいます。ひいおばあちゃんは、かいごしせつにいます。ぼくがほいくえんせいのころじぶんのあしで、じょうずにあるくことができなくなりましたので、くるまいすのついています。そこには40人くらいの人がいます。くるまいすのついている人、つえをつかっている人、ベッドにねている人もいます。ひいおばあちゃんは、一人でごはんをたべれるけれど、トイレは一人でできません。だから、しせつの人にてつだってもらいます。

ぼくは、がっこうがやすみのときにあそびにいきます。ぼくがあそびにいつているときは、くるまいすをおしてトイレのそばまでつれて行ってあげます。ぼくは、くるまいすをおすの

がだいすきです。ひいおばあちゃんが

「ありがとう。」

と喋ってくれるからです。まわりのおじいさんやおばあさんにもえらいねといわれるので、ぼくはとってもうれしくなります。だからぼくはこれからも、ひいおばあちゃんのくるまいすをおすおてつだいをつづけたいとおもいます。なつやすみにがくどうで、くるまいすをおすたいけんをしました。がくどうのおともだちもくるまいすをじょうどうにおすことができます。くるまいすをおすたいけんができれば、たくさんのひとがくるまいすをおすおてつだいができるようになるので、いいなとおもいます。

最優秀賞

ふれあい賞

ふつうに生きたい

伊勢原市立竹園小学校

五年 松田 一真

二十四時間テレビを見ていたら、生まれつき右うでのない少女が水泳をやり続けていて、すごいなあと思いました。

でも、その子のお母さんもショックだったし、その子も人前には出たくなかったと言っていました。

ほくも生まれつき両耳が聞こえづらくて、ほちよう器をつけています。なので、その気持ちはよく分かります。ほくのお母さんは、耳が聞こえづらいからこそ、ほくが赤ちゃんのときから、いっぱい外につれ出してくれたみたいです。たくさんのいろんな音やたくさんの人の声を聞かせるためと言っていました。だからほくは小さいときから今まで、外で遊ぶのが

大好きなんだと思います。だけどほちよう器をじろじろ見られたり、悪口じゃないけれどソコソ話をされたりするのがすごく悲しいなあと思うときがあります。

ぼくは、自分では、ふつうに生きていると思っています。苦手なこともあるし、得意なこともあるし、友達と遊んだりけんかしたりして過ごしています。ぼくは耳が少し聞こえづらいつとところがあるけれど、周りの人と同じ人間だと思っています。友達とケンカしたときに、ほちよう器のことを言われてとても悲しい気持ちになったことがあります。どうしようもなく治すことができないから、本当にくやしかったです。そういうときにしよがい者じゃなければ良かったのにも思つたことが何回もありました。そういう気持ちをもつと分かつてもらいたいです。ぼくの周りだけじゃなく全世界の人に分かつてもらいたいです。

ぼくはしよ来、科学者が研究者になつてしよがいが治せる薬を開発したいです。そして、自分の耳も治したいです。

最優秀賞

神奈川県共同募金会長賞

優しさ

南足柄市立向田小学校

六年 小 俣 ソフィア

八才の秋、私は一カ月ほど松葉杖で生活しました。その時経験したことは、私の考え方を大きく変えるものとなりました。

おどろいたことは階段の、のほりおりがとでもこわかったことです。一段づつのほるので、時間がかかったことにもおどろきました。階段をのぼる時はまず、松葉杖を階段にのせ、おしあげて片足をのせる。このくり返しなのですが、階段をのぼるにつれ、後ろにぐいっとひっ張られて階段をころげ落ちそうになる感覚になりました。気づけば松葉杖をにぎる手にぐっと力が入っていました。友達と遊びながらかけ上がった階段、大好きな本をかかえてのぼっていった階段、松葉杖をにぎりしめながらのぼった階段。みんな同じ階段でしたが、体が

少し不自由になるだけで感じ方が全くちがいました。社会には手や足が不自由な方、目が見えない方、耳が聞こえない方など様々な人がいます。私が経験したことを通して体の不自由な方と同じ目線で、同じ気持ちで過ごすことができました。

松葉杖で過ごすのには悪いことだけではありませんでした。私が初めて松葉杖で登校した朝、クラスメイトは「どうしたの?」「階段平気?」「無理しないでね」などという心温まる言葉をたくさんかけてくれました。階段をのぼる時も面白い話をたくさんして、「ゆっくりあせらないでね」という言葉もかけてくれました。一番助かったのは、せ中を支えてくれたことでした。後ろにころげ落ちそうになる感覚がやわらぐからです。「せ中を支えるということが心を支えるということにつながっている」そう思いました。

私の一ヵ月ほどの松葉杖で過ごした日々はクラスメイトの優しさが私のきょうふをつつみこんでくれた一ヵ月でした。「私も体の不自由な人がいたら私の優しさでつつみこんであげたい」そう思いました。私が優しさでつつめばつつむほど笑顔が増え社会がよりよくなることを願って今日も生きています。

この社会に笑顔が増えますように。

中学生の部

最優秀賞

神奈川県知事賞

僕の姉

秦野市立南中学校

二年 伊藤大地

皆さんはダウン症という障害を知っていますか。

僕が小学校に入学する少し前に、初めてお母さんと二人だけで遊びに出かけた。どこに出かけたのかは覚えていないが、最後にファミレスでご飯を食べた。その時、僕の姉がダウン症という障害があると聞かされた。当時の僕には難しい話だったが、僕が小学校に入学したら姉の事で嫌な思いをするかもしれない、でも誰も悪くないから堂々としなさいと言われた事は良く覚えている。

小学校に入学して、姉の学年の男の子から「こいつの姉ちゃん、ちゃんとしゃべれないん

だぜ」とからかわれた。その時何も言い返せなかった。僕が二年生になった時姉はクラスでいじめられて学校に行けなくなった。二週間も女の子に蹴られていたり、ひどい事を言われ続けて、身体がおかしくなってしまった。学校が怖いと言っていた。やっと姉が学校に行けるようになって僕も僕も気になって、学校に着くと姉の教室をのぞきに行った。そこにはいつもお母さんがいた。僕が幼い頃からお母さんが「心の強い人になりなさい」と言っていた意味が少し分かった。学校だけじゃない。家族で出掛けた時には、姉をジロジロ見られたり振り返られたり、指を指されたりする。姉は何も悪くない。僕達のように障害が無く生まれてきた人でも苦手な事だってあるし、皆んなと同じに出来ない事だってあるのにひどい人が沢山いるのが悲しかった。

小さい頃の姉は具合が悪くなると入院する事が多かった。全身の筋肉が弱くて僕達が簡単に出来ることでも、姉にとっては大変な時が沢山ある。そんな大変なことが僕にもわからなく行動が遅くてイライラする時もあるし、根性のある頑固になる時は頭にくる。障害が無く生まれてきた兄弟でも、そんな風に思う事はあると思うし、兄弟げんかだつてする。姉はやると決めた事は必ず頑張り続けるし、我慢強い。人の悪口も言わないし、人の良い所を見つける。いじめられてもすぐ許す事が出来る。何でも前向きに考えるし、挑戦する勇氣もある。毎年僕の誕生日に、頑張つて作った手作りのプレゼントをくれる。こんな良い所がある姉なのに、なぜ皆んな冷たくするのか悔しくてたまらなかつた。

ダウン症は姉が病気になるたのでお母さんが病気になるたので無く、千人の赤ちゃん

に一人の確率で生まれてくる障害だと聞いた。もしかしたら、僕がダウン症で生まれる可能性だってあったはずだ。姉が千人の代表になって生まれただけなのに、それが分からない人が大勢いる。

僕のお父さんは姉を障害児として特別扱いはしない。悪いことをすればすごく怒るし、良いことをすればすごくほめる。

母は姉の障害を知った時に、ショックが大きく毎日泣いて一年以上家からほとんど出られなかったそうだ。それでも父はどこにでも姉を連れて行つたと聞いた。すごいと思った。僕は生まれてから母が泣いたところを見た事がない。今までたくさん泣いたから、どんな事があってももう泣かないと決めたらしい。

そんな両親で良かった。そんな両親だからか、姉を障害児学級で過ごす事を選ばなかった。小学校も中学校も通常のクラスで姉は過ごした。姉は友達と楽しく過ごす事が嬉しくて、自分の出来る事を頑張り、僕より勉強をしていた。でも、毎晩遅くまで姉のためになる事や法律を調べたりしていた母が、姉にひどい事を言う人にも、頭をペコペコ下げていたのが嫌だった。障害者として生まれただけで、皆んなと同じクラスで過ごすことがこんなに大変なんでおかしいと思った。僕も悔しかった。皆んな同じに過ごさなければ解ってもらえるはずがないと思う。車椅子の障害のある人などは、どんな事に手を貸してあげられるか解りやすいと思う。でもダウン症の人はそれぞれ僕達と同じに違って、手を貸してほしい所も違っている。だからこそ、もっと皆んなが障害を理解してその人自身を知る事が大切なんだと思う。

障害のある人ない人を分けないでほしい。僕達皆んな、命の重さは同じなんだから。



最優秀賞

神奈川県教育長賞

人とのかかわり

伊勢原市立成瀬中学校

三年 東 愛美

私が小学校の頃、母がクリーニング店をしていた時のことです。一人のおばあさんが「これおじいさんのお気に入りだからきれいにしてほしい。」と一枚のセーターを持ってきました。母は「素敵なセーターですね。大切にクリーニングします。」と受付をしていました。おばあさんは、おじいさんのことや昔のことを長い時間話していました。私は母に「知ってる人なの。」と聞くと「知らないけど沢山お話がしたかったんじゃないかな。」と言っていました。

数日後、おばあさんがセーターを取りにきました。「きれいにしてくれてありがとう。」と言って、嬉しそうにまた長い話をしていました。

その数日後、同じセーターを持っておばあさんがお店にきました。以前と同じ会話をし

います。「この前と同じセーターだよね。」と母に聞くと、「そうだね。よっぽど思い入れがあるんだろうね。」と言って、母は工場に送るのではなく、きれいにたたんで包装していました。「お金をもらったのにクリーニングしないの。」と私が聞くと「しないよ。」と言いました。きれいに包装したセーターとおばあさんからもらったお金を封筒に入れていました。当時小学生だった私には状況が理解できませんでした。

数日後、おばあさんの娘さんが怒鳴り込んできました。「ここはボケている人から平気でお金をとるんだね。」と言われました。母は「一回目は工場でクリーニングしたのでお金を頂きました。でも、今回は先日お渡した時と同じ状態だったので、私の判断でクリーニングはしていませんので、お金はお返しする為に取ってあります。」と言うと娘さんは落ち着いて、おばあさんが認知症だということ、おじいさんは数年前に亡くなっていること、黙って外に出て行ってお金を全部使っていることを話していました。「次来たら追いかえして下さい。」と娘さんが言った時、母は「今回のようにさせてほしい。」と言っていました。娘さんは戸惑いながら「なんでですか。」と聞いたとき、「おばあさんのお店での様子を見てほしい。」と母は言っていました。

その後も週に何回もおばあさんはきました。認知症が進んできたからかはわかりませんが、クリーニングを持ってくるのではなく、畑仕事をしにきました。もちろんお店の中は土なんかないのに……。話を聞いていると「じゃがいもと玉ねぎを植えようかね。」とおばあさんが言う。「その横に人参もお願いね、カレーの材料がそろうから。」と普通に言っている母。私は「マ

「マ大丈夫？」と思つてしまふほどでした。母との約束通り娘さんがこつそり見に来ました。娘さんは泣きながら「こんな生き生きとして笑顔で話す母を久し振りに見た。」と言つていました。おばあさんは亡くなつたおじいさんと仲良く畑をしていたそうです。高齢者だから、誰も作つた野菜を食べないからと畑をやめさせたそうです。その頃から認知症になつたかもしれない、そういう母を受け入れられなくて怒つてばかりだつたと話していました。

おばあさんにとつて畑はおじいさんとの大切な思い出であり生きがひだつたんだと、今の私ならおばあさんと母のやりとりが少しは理解できるような気がします。

あらためて、その時の母の気持ちを聞いてみました。母は初めてお店に来たときから認知症ではないかと思つていたそうです。日中もしかしたら一人なのかもしれない、話をする人がいないのかもしれない、フラフラ歩いて事故にあうかもしれないと考えた時、話相手なら自分でもできるし、安心だからと言つていました。「今は少子高齢化、核家族化で、お年寄りには厳しいからね。いくら自分の親でも認知症になれば、家族は苦しい思いをする。親だから受け入れたくない気持ちもある。だからどうしても怒つてばかりになつてしまふ。そんな時、少しでもおばあさんに寄りそうことができたなら、頑張つて生きてきた、おばあさんへの敬意だ。」と母は言っていました。

これから先、もつと少子高齢化が進むかもしれません。その時私は、どんなことができるでしょうか。お年寄りの気持ちに寄り添える心の優しい人になれるように努力したいと思います。

最優秀賞

日本放送協会横浜放送局長賞

ひいおばあちゃんへの恩返し

大井町立湘光中学校

一年 澤地 未依奈

今年の四月、大好きだったひいおばあちゃんが天国へ旅立ちました。七月に百歳の誕生日を迎えるはずだったひいおばあちゃん。家族や親戚みんなで盛大にお祝いをする計画を立てていたのに……。

私が小学生のときに、ひいおばあちゃんのことを作文にしました。そのことをひいおばあちゃんは「みーちゃん、ありがとねえ。」と何度も言いながら喜んでくれました。そんなひいおばあちゃんの姿がまるで昨日のことのように思い出されます。

ひいおばあちゃんは今年の二月に体調を崩し入院してしまいました。入院する前のひいおばあちゃんはもうすぐ百歳になるとは思えないくらい元気で、身の回りのことは自分で出来

るし杖や手すりを使って歩くこともできませんでした。しかし、入院が長引くにつれて食が細くなり、一人で歩くことも食べることもできなくなっていました。そして病院に会いに行っても私たちのことが誰だかわからず、笑って話をしてくれることもなくなっていました。それでも話しかけると「すみませんね。」とお礼を言ったり「お祭りがあるからご馳走を食べていってね。」と夢を見ているかのようなことを言ったりするときもありました。お見舞いに来た人たちはみんな「いろいろなことを忘れていったとしても、お礼を言ったり気を使ったり人をもてなすことだけは忘れないなんてハナさんらしいね。」と言っていたそうです。私や家族、親戚も同じ気持ちでした。

そんなひいおばあちゃんの体調が安定してきたころ、退院後の生活をどうするのかみんなで考えました。入院するたびにすぐ家に帰りがっていたひいおばあちゃん。一緒にくらししているおばあちゃんは、大変だと思うけれど、ひいおばあちゃんができるだけ穏やかに過ごせるように家に連れて帰りたいと、在宅での介護を決めました。

在宅での介護に向けて、家族、親戚がオムツ交換や食事の介助、ベッドから車椅子への移動などを練習するため交代で病院に通いました。そこで実際にひいおばあちゃんの世話をしてみても、今の状態のひいおばあちゃんを在宅で介護することは想像以上に大変でした。そのことは、入院する前のひいおばあちゃんの状態がどれだけあったかが改めて感じられたそうです。

そろそろ退院かと思っていた矢先、ひいおばあちゃんの容態が急変したとの連絡で急いで

病院へ駆けつけました。その日から家族や親戚が交代で病院へ泊り込み付き添いましたが、ひいおばあちゃんの意識がもどることはありませんでした。

ひいおばあちゃんの葬儀の日はまるで台風のように大荒れの天気でしたが、大勢の人がお別れに来てくれました。ひいおばあちゃんには娘が五人、孫が十一人、ひ孫が十人いますが、全員が一度に揃ったのはこの日が初めてでした。みんなでひいおばあちゃんとの思い出話をたくさんして、たくさん泣きました。

火葬が終わるころまで大荒れだった天気が一転、さっきまでの雨がウソのように晴れて、空には虹が架かりました。みんなが部屋から出て空を見上げて歓声をあげました。「おばあちゃんすごいな!」「おばあちゃんが架けてくれたんじゃないかな?」とみんなが口々に言いましました。私はその様子を見て、この虹は沈んでいたみんなの気持ちを和ませるために、ひいおばあちゃんがくれた最後の贈り物なのではないかと思いました。私はこの景色を一生忘れることはないでしょう。

今、こうして私たちが生きていられるのはひいおばあちゃんが厳しい時代を生き抜いてきてくれたからです。とても感謝しています。が恩返しはしたくても、もうひいおばあちゃんに何かをして返すことはできません。しかしひいおばあちゃんがつないでくれた「この命を守り、この先の世代につなげていくこと。」またひいおばあちゃんが教えてくれた「感謝の言葉や気持ちをお忘れずに生きていくこと。」がひいおばあちゃんへの恩返しになるのではないかと思います。

ひいおばあちゃん、百歳のお祝いしたかったね。残念だったけど、みんなでひいおばあちゃんの見送りをすることが出来てよかったよ。長生きしてくれてありがとう。



最優秀賞

テレビ神奈川社長賞

叔父が教えてくれたこと

葉山町立葉山中学校

三年 白岩 桃 奈

私の叔父は重度の知的障がい者です。私が小さい頃は離れて暮らしていましたが小学二年になった年に父の転勤でその叔父と祖父母が暮らす家の近くに引越すことになりました。その頃から叔父と関わるようになりました。はじめはとても嫌でした。叔父は私たちが話すような意味のある言葉は話せません。叔父が考えたオリジナルの手話で会話をしますが少しも上手くできませんでした。叔父は思い通りにならないと暴れてしまうことも、私を持っていくジュースやお菓子を奪ってしまうこともありました。私は叔父にどう接していいのかわからなくなり「怖い」と思うようになりました。そして、私が何よりも嫌だったのが叔父と一緒に出掛けることです。すれ違う人が大人であろうと子どもであろうと叔父と一緒にいる

私たちのことをじろじろ見てくるのです。それがとても嫌で、少し距離を置いて歩くこともありました。

そんなある日、叔父が持っているジュースがおいしそうでした。とてもものが渴いていたので少しだけいいから欲しかったのです。

「そのジュース、ちよつとちよつとください」

怖かったけれどジュースを指さしながら言ってみました。すると、叔父はコップを持ってきて私に半分も分けてくれたのです。驚きました。そして、とてもうれしかったです。何度も飲んだことのあるジュースだったけれどこの時はいつもより何倍もおいしく感じたのを覚えています。叔父は怖くなかったです。とても優しかったです。その日から私は叔父のことをもつと知ろうと思いました。ジュースが好きなこと。カレーパンが好きなこと。貝類と納豆が嫌いなこと。出掛けることが好きなこと。手先が器用なこと。みんなが揃っていないと嫌なこと。人が泣いたりしているのが嫌いなこと。きれいな好きなこと。いろいろなことを知りました。いろいろなことを知ったら周りの人がじろじろ見てくるのなんてどうでもよくなりました。むしろ、堂々と一緒に歩くことにしました。

それから叔父だけではなく障がい者についてもつと知りたくなり、学校の図書室に置いてある本は何度も読みました。クラスでスピーチをするときには叔父について話しました。そして、私が一番印象に残っているのは叔父が通っている障がい者施設にボランティアに行ったことです。そこではその施設を利用してはいるたくさんの障がい者の方と関わりまし

た。その人の特徴によってやることも食事も全く違い、のどに食べ物がつまらないように小さく切っておくなどさまざまな工夫がされてきました。その工夫は障がい者だけでなく、高齢者や小さな子ども、病気やけがの人など、誰にでも必要になることのある配慮なのではないかと気づきました。はじめは不安で緊張していたけれどこの施設でのボランティア活動は、障がいのある人たちも私たちと変わらない毎日を送っていることを知る貴重な経験になりました。

「障がい者」という言葉でひとくくりになっているけれど「障がい者」の中にもいろいろな人がいます。当たり前のことだけれど障がいのある人もない人もそれぞれ個性は違い同じ人なんて誰一人いません。障がいのある人を「かわいそう」と思う人もいるかもしれませんが、私はそれは違うのではないかと思っています。確かに大変なことが多く苦労するけれど、私たちと同じように楽しいこともあるのです。障がいのある人やその家族などが窮屈な思いで生きていくのではなく全ての人が生活しやすい環境をつくっていくべきだと思います。そのため中学生の私にできることは少ないかもしれませんが、それでも、障がい者だけでなく福祉についてもっとたくさんを知り、今の自分にできることをやっていきたいと思っています。私はたとえ、どんな状況になっても諦めず、人を思う気持ちを大切にしたいです。

叔父と口と言葉を使っておしゃべりすることはできないけれど手話を使ってならできます。そんな叔父は私にいろいろな人と関わる大切さを教えてくれました。はじめはどう接すればいいのか分からなく怖かった叔父も今では大切な存在です。

最優秀賞

神奈川新聞社長賞

色

茅ヶ崎市立松浪中学校

一年 栗原那綺

「早く行こうぜ、みんな先に行っちゃっているよ。」

僕は半分いらつきながら言った。

「待ってー。疲れた。」

単語を並べただけの言葉を話して彼は、しゃがみこんでしまった。早くしろよ！という言葉葉がのどまで出かかった。が、いらついている気持ちをぐつとこらえて僕は口を開いた。

「少しは休めたかな？また歩こうか。」

汗で服がびしょびしょだった。顔からポタポタ汗が垂れ落ちる。初めての山登りに僕も疲れていた。社会科見学で城跡に行くために、山を登っているというのに、彼はまるで遠足気

分だった。

「ねえお弁当一緒に食べようね。」

「うん」

僕は一言返すだけで、精一杯だった。クラスみんなは、先にどんどん行ってしまい、早く追いつきたいのに、呑気にお弁当の話かよ。僕は彼の手をひいて、山を登った。ひいたその手と手の間は、汗でぬるぬるしていた。やっと城跡に到着した時は、お腹がペコペコだった。大きなおにぎりをほお張る彼の顔を見てなんだか一緒に山を登った達成感があった。

僕の母は、障がい者施設で働いている。何をすることもゆっくりペースな彼のこと、社会見学でのことを母に話してみた。母は僕の目をしっかり見て僕の話聞いてくれた。

「でもよく頑張ったわね。彼のペースと一緒に歩いたのよね。でもクラスの友達がどんどん先に行ってしまってたのよね。」

そうか！僕は母の言ってくれた一言でなぜ、あの時、自分がいらついていたのか気づかされた。彼の気持ちなんて、何も考えてあげられなかつたんだ。彼は、僕がいらついたり、焦っていたりしたよりも、何十倍も不安だつたんだ。母は僕にこう言った。

「待つてあげることも大切なことなのよ。彼には彼のペースがあるのだから。あつそうだが、今度施設のイベントがあるから来てみない？」

母に誘われて僕は施設に行つてみることにした。

僕は、未知の世界にとびこむようで、とても緊張していた。どんなお話をしてみたいい

「んだろう？そーつと部屋のドアを開けた。」

「いらっしやいませ。」

「こんにちは。」

ぎゅうと手を握りながら言ってくれる人。みんな、ニコニコしていた。部屋の中の空気が優しくピンク色に感じた。僕は大きな声で、

「こんにちは。」

と嘗試してみた。部屋の中には、大きな織り機がいくつもあった。小さい頃に絵本で読んだ、『鶴の恩返し』で見た織り機だ。

「こっち、こっち、来る。」

利用者の方に手を引かれてどんどん部屋の中に入っていった。

「これ、やる。こっ、すわる。」

僕は言われるがまま、織り機のいすに座った。どうやら、織りの体験が出来るらしい。利用者の方が何色もの裂き布を持ってきてくれた。僕はとてもビックリした。紫、黄、水色に茶色。色の組み合わせが斬新だったからだ。

「順番、順番、織る」

指をさして、機械のやり方を教えてくれた。コーンカトン、トントン。ゆっくりだけど、織り上がっていく。プチマツトが出来上がるのが嬉しくて仕方無かった。単語を並べて教えてくれた利用者の方の顔がニコニコしていた。僕もいつの間にか、緊張がとれていた。僕には、

考えもつかなかった色の組み合わせに戸惑いながらも織りよったプチマットは素晴らしい配色だった。そして僕はある事に気付いた。障がいのある人は僕達が得意なことは、苦手かもしれない。しかし障がいのある人が得意なことは僕達はマネすらできないのだ。

次の朝、彼と登校するとき、彼の得意な国名でクイズごっこを試してみた。僕の知らない国名も得意気に話している彼の顔は、朝の太陽と同じくらい輝いていて、彼がかつこよく見えた。人は皆誰でも、みんな同じに、素晴らしいものを持っているのだ。僕はそれをお互いに引き出し合っていききたい。同じ目線で、同じ心で、一緒に笑って、いつでもいつまでも心をつなげていきたい。

最優秀賞

ふれあい賞

祖母との会話

厚木市立厚木中学校

三年 樋川

陸

「あんたいくつになつたの?」

「中3だよ。」

「もうそんなに大きくなつたのかい?」

僕と祖母の会話だ。この会話が何度も繰り返される。祖母は今年で八十六歳になり、埼玉県で一人暮らしをしている。料理上手で何でもテキパキこなせる人だ。お正月などに帰省すると沢山の料理をふるまってくれ、中でも僕は「筍ご飯」が好きだった。しかし、数年前から少しずつ物忘れをするようになり、「筍ご飯」もいつの間にか作る事も無くなっていた。認知症、祖母はそう診断された。僕は落ち込む祖母に「まだまだ大丈夫だよ!」と励ます

事しかできなかつた。認知症と言つても、まだ生活するのにさほど支援は無く、足腰も丈夫だったので、親戚が協力して祖母を見守つていた。

ある時、父が祖母の家から帰宅したので、

「おばあちゃん元気だった？」

と聞いてみた。すると、

「おばあちゃん、結構物忘れが進んできたな。」

と父はポツリと言ひ、

「あんなに色々忘れるのに、孫の小遣いだけは忘れないんだよ。」

と言つて小さな袋を僕にくれた。うれしかったけど、なぜか素直に喜べないでいた。

ある日、両親はおばあちゃんの状態を話し合つていた。施設や、近くへの引越など色々考えていた。

「おばあちゃんは自分の家で暮らしていきたいそうだ。」

「でも一人暮らしには無理がある。」

と両親が一生懸命話しているのに僕は何もできなかったのが悔しかった。そこで、その日から僕は、インターネットで福祉介護のことについての情報や対処法などを手当り次第に探した。

そして検索を続けていくうちに、僕は、ヘルパーさんの存在に気がついた。早速父に伝えたら、両親もそれしかない判断していたらしく、

「おばあちゃんのことにはヘルパーさんにおまかせしてみよう。」

と父が言った。それから両親は色々と手続きを済ませ、ヘルパーさんが来てくれる事になった。これまで事態は丸く収まる、と思っていたが、そうはいかなかった。祖母はかなりのガンコ者らしく、ヘルパーさんが来る前に家の事や、買い物を済ませていた。

「ヘルパーさんに任せるぐらいだったら私がやる！」

とずっと言っているらしく、父が説得しても、なかなか了承してもらえなかった。でもヘルパーさんは

「こういう人はたくさんいますから慣れていきますし、もうそろそろ了承してくれますよ。気長に待ちましょう。」

と言っていた。その言葉は現実となり、数日後には、

「色々やってくれて、助かるわ。」

とまで言うようになって、やっぱりプロは違うなあと感じさせられた。

社会には僕の祖母のように物忘れが酷い人、困っている人がまだまだたくさんいるだろう。そんな人たちを支えていける社会を作らねばならないことを痛感した。

では今の僕に何ができるのか？

「僕はおばあちゃんに何ができるのかな？」

と母に聞いてみると

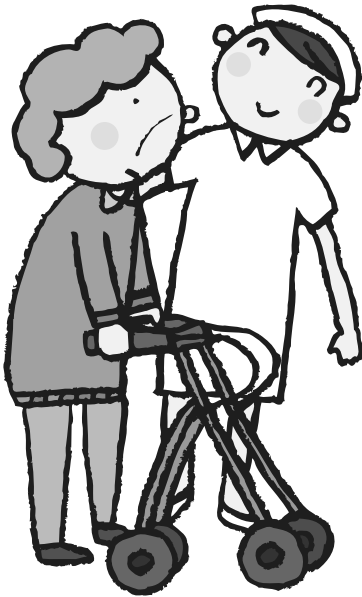
「時々あなたの元気な声を聞かせてあげれば？」

という答えだった。それから僕は時々、祖母に電話をする。

「おばあちゃん元気？」

「元気だよ。ところであんたいくつになったの？」

今日僕と祖母との会話は繰り返される。



最優秀賞

神奈川県共同募金会長賞

個性を尊重し合って

相模原市立旭中学校

一年 光橋 優奈

私は、ニュースを見てショックを受けた。それは、津久井やまゆり園で起きた十九人もの障害のある人達が亡くなった事件である。この事件について、ネットで詳しく調べたところ、衝撃的な言葉が目飛び込んで来た。

「人に危害を加える重度障害者に、人権なんか与えなくていい。犯人は良くやったと思う」
「障害者という税金食い潰すだけのやつらを処分した英雄」

私は、そういうことを普通にネットに書く人達の気持ち分からない。障害のある人達も私達と同じ一人の人間として生まれて来たのになぜ差別をするのだろうか。

私の通っていた小学校には、「なかよし級」という特別学級がある。小学校の時よく遊びに

行っていた。そこには仲の良い友達がたくさんいる。最初に遊びに行ったのは五年生の時だ。

「どんな子がいるのだろう」

「なにかされないだろうか」

初めて遊びに行った時はとても不安だった。しかし、毎日遊びに行っている内に不安もなくなり、とても仲良くなった。休み時間には教室で戦いごっこをしたり、外に出て鬼ごっこやなわとびをした。小学校を卒業した今でも、会うと話しかけてくれたり、元氣よくあいさつをしてくれる。

なかよし級の友達と関わって気付いた事は一人一人の個性が豊かな事だ。

例えば、人前に出る事が得意で、学年の指揮者や運動会の応援団長を務めている子、自分の知らない国旗を暗記している子や、凶工がとても上手な子など様々な特技を持っている子がたくさんいた。その姿を見て私は改めて差別をしてはいけないと思った。また、一人一人の個性を尊重し合っていくべきだと思った。

私が尊敬している偉人の一人に「アン・サリバン」先生がいる。彼女は、目と耳が不自由なヘレン・ケラーの家庭教師として指文字や点字を教え、学ぶ事の喜びを教えた。ヘレンの活動にも協力し、生涯支え続けた人だ。サリバン先生のおかげでヘレンは自分の生きる道を見つけた。それは、目や耳の不自由な人達、体の不自由な人達がより良い生活ができるような、そういう人達が希望を持ち安心して暮らせるような社会をつくるために一生をささげることだった。

私も将来、サリバン先生のように障害のある子ども達に希望を与え、笑顔で過ごせる環境を作れる先生になりたいと思う。また、障害のない子ども達には、障害があっても、一人の人間として生まれてきたのだから差別をしてはいけないという事を伝えていきたい。

そのためには、社会から障害のある人への差別をなくす事が大切だと思う。今の私達にできる事は、身近にいる障害のある人とふれ合い、お互いに理解し、尊重し合っていく事だと思う。



最優秀賞

神奈川県社会福祉協議会長賞

この広い世界で

相模原市立藤野中学校

一年 山崎

花

先日、とても悲しく、あつてはならない事件が起きてしまいました。津久井のやまゆり園で起きた殺人事件です。私はこのニュースを聞いた時、あ然としてしまいました。この殺人事件で亡くなった十九人の方が体に不自由のある人だったからです。

私は、殺人事件ほどおろかなものは無いと思います。見ず知らずの他人を、自分の考えや気持ちから殺してしまう、こんなにみにくい事があるのでしょいか。これから感じるうれしさや悲しさ、その人の歩む人生を一瞬で消してしまう人の気持ちを、容疑者は考えたことがあるのでしょいか。

「世界が平和になりますように。」

この事件が起きた直後に容疑者が書きこんだ言葉です。『平和』の意味を辞典で調べると、こんなことが書かれていました。戦争がなく、世の中がおだやかな様。平和とは、人を見下すことなのでしょうか。体の不自由な人を殺すことなどでしょうか。人、一人の大切さを分かってこの書き込みをしているのか、腹立たしく思いました。

障害者の人は、体に障害があり、障害のない人との差ができてしまいます。しかし、障害者の人は、障害者になりたくて生まれてきたわけではありません。人が出来て当たり前のことが自分にはできない辛さを一番知っているのは、障害のある本人だと思います。だからこそ、周りに居る人と支え合い、助け合いながら生きていく事が必要なのではないのでしょうか。一人一人の支え合い、助け合いが集まれば、本当に求めている『平和』が出来るのではないかと思います。

そして、津久井というと、私の住む地元の一駅先です。決して人事ではないということです。いつ、どこで、何があるか分からないこの世の中で、楽しいこともたくさんあると思いますが、それと等しい位にこわいこと、おそろしいことがたくさんあるということをお忘れず、注意していきたいです。

この事件から学んだことは三つあります。

一つ目は、障害のある人に対する協力です。障害のある人は、障害のない人より何かが出来なかつたり、上手く言葉が伝えられなかつたりなどという症状があります。しかし、障害者の方は、この体に生まれてきたたくて生きているではありません。確かに自分の何げない

行動が、障害者の人にとっては力を借りなければ出来ないということもたくさんあるでしょう。しかし私達が助けられることもあります。学ぶこともあります。だからこそ、同じ世界に生きる私達は、協力しあい、支え合いながら生きる事が必要とされるのだと思います。

二つ目は、自分の殻に閉じこもらない事です。この事件の容疑者は、自分の一方的な考えから自分の殻に閉じこもり、この犯行に至ったのだと思います。そうではなくて、周りの意見を聞いたり、手でふれて体験したり、たくさんの方に挑戦することで、違う方向からの考え方や、新しい発見に出会えるのだと思います。自分の考えが全て正しいとは限りません。この広い世界で、たくさんの方や物に出会い、挑戦することが生きていく中で大切だと思います。

三つ目は、自分にも、もしも、がすぐ近くにあるということです。毎日絶えることなくニュースが流れます。そのニュースは人事ではなく、自分に訪れるかも知れないのです。今日どこかで起きたその事件には、もしも、が現実には起きた人が居るということ。おそろしい事件はすぐ側で待っているかもしれないという事を改めて考え、日々当たり前のように生活している今に感謝したいと思います。

今この世界で、約七十一億の方が生きています。その中には、乳児や高れい者、障害者など、一人では生活することが困難な方がたくさんいます。しかし、七十一億人いれば七十一億人、だれかに大切に思われ、だれかに必要とされています。だれも必要としない人などいません。だからこそ辛いことがあっても、自分らしく、前を向いて生きていく事が大

切だと思うのです。この広い世界に生きている自分の大切さに気づき、後悔のない人生となるよう、たくさんの人に出会い、たくさん的事を経験して、一生懸命がんばっていききたいです。



神奈川県福祉作文コンクール入選者名簿

小学生の部

優秀賞

ぼくのおじいちゃん	相模原市立根小屋小学校	三年	川上
ひびけわたしたちの「ビリーブ」	平塚市立南原小学校	三年	尾上
みんないつしよの未来	横浜国大教育人間科学部附属横浜小学校	四年	井祈
人との関わりの大切さ	横浜市立帷子小学校	四年	向井
ちよつとした勇氣	平塚市立金目小学校	五年	中西
僕の気持ちの前を向く理由	小田原市立千代小学校	五年	三浦
自分でできること	秦野市立末広小学校	五年	朝倉
ほほえみさんとの交流	大井町立相和小学校	五年	澤田
障害をもった兄	相模原市立共和小学校	六年	野村
見えないところ	開成町立開成小学校	六年	遠藤

準優秀賞

心で「きく」	茅ヶ崎市立鶴が台小学校	二年	岩本
みんなはだれかの大切な人	厚木市立上依知小学校	三年	大城
みんなえがお	川崎市立王禅寺中央小学校	四年	田上
町の中の小さな工夫	横須賀市立小原台小学校	四年	坂井
髪の毛のプレゼント	大和市立西鶴間小学校	四年	小室
手話を学んで	開成町立開成南小学校	四年	山口
人を笑顔にする犬	川崎市立下小田中小学校	五年	山口
一人一人の心がけ	座間市立相模野小学校	六年	菊地
介護福祉士の仕事	開成町立開成南小学校	六年	永田
祈り、そして寄りそう心	函嶺白百合学園小学校	六年	佐藤
			望花
			藤原
			永田
			菊地
			山口
			小室
			坂井
			田上
			大城
			岩本
			大城
			田上
			坂井
			小室
			山口
			菊地
			永田
			藤原
			佐藤
			望花

中学生の部

優秀賞

私の思い
パリパリブラウス
なぜ福祉は「しあわせ」なのか
見えない障がい
心のバリアフリー
初めてのヘアドネーション
あなたの笑顔が見たいから
当たり前が変わったら
おせっかいと、思いやり
助け合って思いやりながら

相模原市立大野北中学校	一年	二見杏奈
秦野市立西中学校	一年	村上陽花
伊勢原市立伊勢原中学校	一年	長谷川朋世
秦野市立北中学校	二年	大嶋莉衣奈
厚木市立玉川中学校	二年	石川拓海
大井町立湘光中学校	二年	相原めい
藤沢市立明治中学校	三年	赤崎沙奈
逗子市立久木中学校	三年	村田真愛玲
秦野市立西中学校	三年	山口明日歩
寒川町立旭が丘中学校	三年	印東優海

準優秀賞

障碍者も人権はある

体験学習

千羽鶴の奇跡

福祉の心あふれる祖母

「弱い立場の人」はいない

高齢者のやり甲斐づくりの為に

介護について

おじいちゃんとサンタ

人として支え合う

お年寄りから学んだこと

相模原市立相模丘中学校

横須賀市立常葉中学校

平塚市立金目中学校

伊勢原市立成瀬中学校

厚木市立相川中学校

伊勢原市立伊勢原中学校

寒川町立旭が丘中学校

大磯町立国府中学校

大井町立湘光中学校

開成町立文命中学校

二年

二年

二年

二年

三年

三年

三年

三年

三年

三年

小林 璃湖

海老原 誓人

澁谷 智夏

木村 七海

小塩 桃子

中津川 伶子

北村 駿人

眞柄 七美

香川 唯美

栗原 悠輔

神奈川県福祉作文コンクール入選作品集 平成 28 年度版

平成 28 年 12 月発行

発 行 者 社会福祉
法 人 神奈川県共同募金会
〒221-0844 横浜市神奈川区沢渡 4 - 2
電話 045(312)6339

社会福祉
法 人 神奈川県社会福祉協議会
〒221-0835 横浜市神奈川区鶴屋町 2 - 24 - 2

電話 045(312)4813

印 刷 神奈川新聞社

社会福祉法人 神奈川県共同募金会
社会福祉法人 神奈川県社会福祉協議会